聖書と説教　　2025 年 11 月 30 日（日）待降節第 1 主日（紫）

新約聖書 マタイによる福音書 24 章 36 節―44 節（新共同訳）

[36]「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父
だけがご存じである。[37]人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。[38]
洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、め
とったり嫁いだりしていた。[39]そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうま
で、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。[40]そのと
き、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。[41]二
人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。[42]だ
から、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あ
なたがたには分からないからである。[43]このことをわきまえていなさい。家の
主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、
みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。[44]だから、あなたがたも用意
していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「その時は、誰も知らない」

本日の福音書は、イエスのこのような言葉で始まります。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである」。

「その日、その時」とは、世の終わりの日、最後の審判の時、キリストの再臨の日時のことです。いつその日、その時が来るかは、ただ父なる神だけが知っているのであって、それ以外の者は、たとえ天使であっても、また、子であるイエスであっても知らないというのです。その時がいつなのかは、ただ神のみが知っておられる事柄なのです。

世の終わりがいつ起こるのか予測できないことは、旧約聖書の創世記に出てくる、神がノアに箱舟を作らせた洪水の時と同じだとイエスは語ります（ルカ 24:37、創世記 6 章―8 章）。

旧約聖書の創世記（6 章）に出てくる、ノアの洪水が起こった時に地上で暮らしていた人々のように、人の子が来る時、つまり世の終わりの日、キリストの再臨がいつ起こるのかは、全く予測できないと語られます。

神は、地上に人を造ったことを後悔し、ノア一族以外の、地上のすべての生き物を滅ぼすために洪水を起こしました（創 6:7）。その洪水が起きる最後の最後まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりして、人の世における日常を継続していました。いよいよ洪水が起きるまで、当たり前に送っていた日常が突如として断ち切られることに気づかなかったのです。

人々の日々の暮らしを瞬時に断絶させる出来事は、全く思いがけずに起こったのでした。そしてイエスは「人の子が来る場合も、このようである」と、キリストの再臨について語ります（マタイ 24:39）。キリストの再臨とは、世の終わりの日に、天に昇った主イエス・キリストが栄光をもって、再び地上に降りてくることです。

イエスは、畑にいる二人の男性と臼をひいている二人の女性のたとえを用いて、世の終わりの日、キリストの再臨の時には、それまでは同じように生活していた人々のうち、どちらか一方が選ばれることを示します。新しい天と新しい地の創造がなされ、新しい天地に入るものが選ばれるのです。

この世界が終わりを迎える「世の終わり」とは、現代を生きる私たちにとって、とても想像がつかない事柄ではないでしょうか。SF 映画などでそういったテーマが取り扱われることはあっても、現実にそのようなことなどあり得ないと思えてしまうでしょう。仮に、いつかはそのようなことが起きるとしても、少なくとも自分が生きている間は起きないだろうと、多くの人は思っているでしょう。

しかし、自分自身の死については、誰一人例外のない、世の終わりの類似経験です。すべての人間は、自分自身の死によって、自分の地上での時の終わりを迎えます。

それゆえに、「世の終わり」についての終末論は、個々人の死について考える手掛かりにもなります。それは、いつかは必ず肉体の死を迎える私たち人間が、この地上での日々のいかなる瞬間も、最後の審判を前にした瞬間であることを伝えます。

一人の人間にとって、自分の死は世界の終わりに等しいことであり、「世の終わり」とも言えるかもしれません。

しかし、個々人の死と世の終末は類似していても、根本的には違います。一人の人間が地上を去ることと、この世が滅びることは同じではありません。

自分が死んだらすべて終わりだという考え方は、人間を刹那的にします。自分が地上から去ったのちも、なお地上で生きていく者たちの幸せを願う心から遠のいてしまうでしょう。

創世記において、神が洪水によってノア一族と限られた動物のつがいを除く、すべての地上の生き物を滅ぼしたあと、神はノアとその息子たちにこのような言葉を語りました。

「わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない」（創世記 9:11）。

そして神は、代々（よよ）とこしえにすべての生き物とご自身との間に立てる契約のしるしとして、雲の中に虹を置いたのです。虹は、神と大地との間に立てられた契約のしるしです。神が地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、神は、神と私たちすべての生き物との間に立てた契約に心を留め、水が洪水となって地をすべて滅ぼすことは決してないと言ってくださったのです（創 9:15）。

神はこう言われました。

「雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める」（創世記 9:16）。

私たちは、自分がこの世からいなくなっても、そのあとも地上で生きている人々が、雲の中の美しい虹を見ることができるように願う心を持ちながら、祈りと共に日々を歩んで行きましょう。

主イエス・キリストはこう言いました。「だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」（マタイ 24:44）。

それまでの日常性を超越する、その日、その時は、思いがけない時に来るでしょう。良いことも悪いことも、ある日、突然やって来ます。そのことは、この世に生まれ、これまで生きてきて、本当に良かったと思える大いなる恵みと祝福の出来事であるかもしれません。

旧約聖書『コヘレトの言葉』において、コヘレトは、人間にとって最も幸福なのは喜び楽しんで一生を送ることだと述べています（コヘレト 3:12）。現世を喜び楽しみ、全て神からの賜物と受け入れ、与えられた生を精一杯生きる。終わりを見つめ、そこから翻って今を生きよ、とコヘレトは私たちに伝えます。

その上で私たちは、自分自身の地上での命が終わりを迎えたあとも、なおこの地上で生きていく人々の喜びと幸せを願い、目を覚まして、希望をもち、神の御心と共に今この時を生きていきましょう。

お祈りをいたします。
天の父なる神様。私たちは、あなたが定められた時を知ることはできませんが、与えられている時間と生を通して、あなたと、隣人と共に生きさせてください。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 2 章 1 節―5 節（新共同訳）

[1]アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。
[2]終わりの日に／主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち／どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい／[3]多くの民が来て言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。主の教えはシオンから／御言葉はエルサレムから出る。[4]主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。[5]ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

新約聖書　ローマの信徒への手紙 13 章 11 節―14 節（新共同訳）

[11]更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。[12]夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。[13]日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、[14]主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

教会讃美歌　294 番「恵みふかきみ声もて」、320 番「しあわせなことよ」、337 番「やすかれ」。